法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

事実とパースペクティヴ

NAKAGAMA, Koichi / 中釜, 浩一

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
10
(開始ページ / Start Page)
29
(終了ページ / End Page)
41
(発行年 / Year)
2014-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009886

Hosei University Repository

事実とパースペクティヴ

中釜浩一

一、事実に関する直観

「事実とは何か」を厳密に規定するのはおそらく困難だろうが、われわれが事実に関していくつかの根強い直観を持っていることは確かである。事実とは、われわれ人間やその他の認識者の認識や願望などから独立に存在する事柄であり、実在するものについて現実に成り立っていることだ、というのが最大公約数的な理解であるだろう。大雑把に言うなら、事実とは、人間あるいは人間の心の側にあるのではなく、実在あるいは世界の側に属する何か、である。事実の正体について厳密には何が言われうるにせよ、事実の概念が、実在・真理・客観性等々の概念に連なる概念であることは間違いない。もちろん、事実にもいくつかの種類があり、自然的・物理的事実ばかりでなく、心理的事実、数学的事実なども存在しており、それらすべてが「世界の側」にあるとは必ずしも言えない、といわれるかもしれないが、ここではひとまず物理的事実（時間空間中で生起する事実）に話を限定しておきたい。

さて、ある事実に対して、われわれは自らの立ち位置からそれを知り、それに対して様々な態度をとったり評価をしたりする。このようなわれわれの側からする事実に対する様々な関わりを、広い意味で「パースペクティヴ」と呼ぶことができるだろう。「同じ一つの事実」には様々なパースペクティヴが対応しており、われわれの持つ具体的経験は、客観的事実と主体の側の様々な条件あるいは制限との協働によって、何らかのパースペクティヴがその時々に生ずることだ、と理解したくなる。上の言い方を使うなら、

Hosei University Repository

「事実そのもの」がわれわれから独立な「世界の側」に属するのに対して、パースペクティヴは、その独立な事実とわれわれ自身との間の「関係のあり方」に関わる、と考えたくなる。「事実」と「パースペクティヴ」に関するわれわれの常識的で素朴な理解は、おおよそ以上なものであるだろう。

二、事実は数えられるか

しかしながら、事実とパースペクティヴに関する上のような素朴な理解をより厳密に考えようとすると、様々な困難が生じてくる。その困難の一つの具体例として、「事実は数えられるか」という問題を考えてみよう。

「今この瞬間に、この教室の中に一体いくつの事実が存在していますか」という問を誰かが発したとしよう。この問に答えられる人は誰もいない。だが、なぜ答えられないのだろう。その理由は、たとえば、個々の事実が小さすぎて目に見えないからでも、その数が膨大すぎて数えられないからでもない。「今この瞬間に、この教室の中にいくつの原子が存在していますか」という問には、原子が小さすぎまたその数が膨大すぎるので、実際に答えることは誰にも不可能だが、原理的には（つまり、世界や実在の側には）はっきりした答がある、とわれわれは直観的に考える。後者の問いに答えられないのは、われわれの側の事情（能力の限界）によるのであって、「本当の答」はわれわれから独立に存在している、と感じられる。これに対して「事実はいくつあるのか」という問に対しては、単に実際的にではなく、原理的に答えようがない、つまり、この問には「本当の答」などはなく、したがってこの問自体、このままでは有意味な問とは言えない、と感じられる。そしてこの問いが無意味である理由は、われわれの直観的な事実の概念には、その個別化あるいは差異化の基準が備わっていない、ということにあると思われる。

「もの」（物理的対象）については、直観的に明確な個別化・差異化の基準がある。それは通常、その「もの」の存在している時間空間的位置やそれが占める領域によって与えられる。「もの」の占める位置や領域は、その「もの」の持つ「輪郭」を通して与えられると考えられる。これに対して、事実には明示的な「輪郭」は存在しない。つまり、ここからここまでが「同じ一つの事実」である、とえるような直観的に明確な基準はない。これが「事実の数」に関する問が無意味に感じられる大きな理由だろう。

だがもちろん、事実の個別化・差異化が、「もの」のそれと同様に、時間空間的性質によって与えられねばならな

Hosei University Repository

い、と考える必然性はないと言われるかもしれない。事実は「もの」とは異なる。「事実の輪郭」は時間空間的輪郭とは異なる仕方で描きうるかもしれない。そして、何らかの仕方で「事実の輪郭」を描くことができれば、事実の個別化の原理を与えて「事実の数を数える」ことも原理的に可能になるだろう。この時、「事実の数」に関する問に対して、「本当の答」が存在すると考えることが可能となる。

三、事実と単称命題

こうした方向からする一つのもっともらしい考え方は、事実の個別化は、それを表現する命題・思想を通して与えられる、というものだろう。フレーゲやラッセルは、事実とは、思想や命題を「真とするもの（truth-maker）」だと考えた。「事実」の概念と思想・命題の概念との密接な関係を前提とするなら、思想や命題の個別化・差異化の基準を与えることができれば、それを媒介にして、それらを「真とするもの」としての事実の個別化・差異化の基準を与えることが可能性となるかもしれない。

だがもちろん、「同じ一つの事実」に対して複数の語り方がありうることを考慮すれば、すべての異なる命題にそれぞれ異なった事実が対応する、と考えることはできないだろう。事実の個別化の原理は、命題や思想の個別化の原理よりも、より「粗い」ものでなければならない。この線に沿った最も素朴な展開は、事実の個別化は、論理的に等値な真な命題の集合によって与えられる、というものだろう。すなわち、論理的に等値な真な二つの命題p、qは、同一の事実に対応する、と考えるのである。

しかしながら、少し考えるなら、このような思想・命題の論理的等値性を用いた事実の個別化・差異化が、われわれの事実理解と必ずしも合致しないことは明らかである。フレーゲの有名な例で考えよう。「明けの明星は明けの明星である」と「明けの明星は宵の明星である」は論理的に等値ではない。フレーゲ流に考えれば、上の二つの文は異なる思想を表現している。思想とは命題の意義である。思想の個別化・差異化は、それに対して人Aがどのような命題態度を持ちうるかの分析によって与えられる。思想pと思想qが異なるのは、pやqが含まれる言語を完全に理解し、かつ合理的な判断を下せる人Aが、pとqに対して異なる命題態度を取りうる場合である。Aは「宵の明星＝宵の明星」に対して肯定的態度をとり、同時に「宵の明星＝明けの明星」に否定的態度を合理的に取りうる。その理由は、「宵の明星」と「明けの明星」が同じ指示（金星）を持つが、異なった意義を持つからである。

Hosei University Repository

他方で、それら二つの異なる思想が、二つの「異なる事実」を表現しているとは考えにくい。それらのtruth-makerは「同じ一つの事実」だと考えるのが自然だろう。フレーゲでは、真理や事実は意義の領域ではなく「指示」の領域に属し、そして「宵の明星」と「明けの明星」は指示を同じくするのである。むしろ、われわれは同じ一つの事実に対して、論理的に等値でない・異なる思想を持ちうる、と考えるべきだろう。このように考えるならば、フレーゲ流の思想とは「事実」に対する、言語表現を介した、一種のパースペクティヴだとも考えられる。

フレーゲ流の「思想」が一種のパースペクティヴであり、思想が文の意義であるとすると、それらの思想が対応する事実とは、様々な意義を通して語られる同一のもの、すなわち、指示対象をその成分として含むような何かだ、と考えたくなる。このような考えの筋道に従うなら、事実の個別化に最も適した言語表現は、通常の命題ではなく、指示対象のみがその中に出現するような特殊な命題（たとえば、ラッセル流の単称命題やde re命題）だ、という考えに導かれるだろう。ここでさらに、単称命題の言語的表現として、対象と概念の順序対による表記を採用するなら、主語述語文の場合には、以下のようなテーゼが立てることができる。

テーゼ1

a、bを意義を異にするが指示を同じくする名前、F、Gを意義を異にするが指示（外延）を等しくする一項述語とし、αをaとbの同一の指示対象（個体）、φをFとGの指示対象（概念）とすると、二つの文Fa、Gbは、異なる思想を表すが、同一の事実〈α：φ〉に対応する。

主語述語文以外の場合も、考え方は全く同様である。

以上のような考え方は、思想や命題を介して事実の個別化・差別化を与えようとする際の、最も自然な展開だと思う。ここでは思想や命題が、いわば「事実の輪郭」を描き出すための物差しとして用いられている。さまざまな物差し（思想・命題）を使用することが可能であるが、測定されているもの（事実・truth-maker）は同一でありうる。だが、このような考え方は成功しない。そのことを以下に示そう。

四、事実の個別化の試みの失敗

以下では特に、二項関係に関わる事実について考える。二つの対象α、βの組に、外延を異にする二つの関係φ、

Hosei University Repository

Ψが成り立っているとする。上の表記を二項関係に拡大すれば、以下のように表しうるだろう。

〈〈α、β〉：φ〉、（たとえば、A君とBさんは横に並んでいる）

〈〈α、β〉：Ψ〉、（たとえば、A君とBさんは恋人同士である）

今、これらの命題がどちらも真であるとする。恋人同士であるA君とBさんが、現在横に並びあっている。このことは、単なる偶然である。恋人同士であることと、横に並ぶこととに特別な論理的関係はない。だが、今・ここには、現に二つの別々の事実があるのだろうか。すなわち、A君とBさんとの間に、二つの別々の事実が、いわば重なり合って、現在成立していると言うべきだろうか。われわれの事実に関する直観は、このような見方を支持するとは限らない。

われわれの事実の同一性・差異性に関する直観がどれほど薄弱なものであるとしても、少なくとも次の原則Aを認めたくなるだろう。

原則A：ある概念が別の概念を含意する時、同一の対象（あるいは対象の組）に関して、それらの概念を用いて記述される事実は、二つの異なる事実ではない。

たとえば、「これは赤い」と「これは色がある」は、「これ」が同じ対象を指す時、その対象に関する二つの異なる事実の記述ではなく、「同じ一つの事実」に対する、詳しさの異なる記述である、と考えたくなるだろう。

さて、A君とBさんの例に戻って、次のような簡単な操作を行ってみよう。φとΨを論理的に含意するような概念θを導入する。最も簡単な方法は、φ＆Ψ＝θとすることだろう。φが「恋人同士である」を意味し、Ψが「横に並んでいる」を意味するとすると、θは「恋並びする」とでも表現できるものを意味する述語となるだろう。このとき、上の原則Aに従うなら、「〈〈α、β〉：φ〉と〈〈α、β〉：Ψ〉は、二つの異なる事実を表すのではなく、同じ一つの事実〈〈α、β〉：θ〉についての、詳しさの劣る二つの記述である」と言わなければならない。

θのような概念が存在しない、あるいはそれを導入してはならない、と考える特段の理由はないように思われる。θに対応する表現を基礎述語として持つ言語を考えることは十分に可能であるし、われわれの科学的言語がいつかそれを必要とすることになるかもしれない。「事実それ自体」

Hosei University Repository

は、われわれの側のパースペクティヴから独立であり、特にわれわれがどのような言語を持つかから独立なはずである。

この例で言われたことは、どのような二つの対象、またそれらに関して成り立つどのような二項概念に関しても言えるだろう。任意の二つの「もの」の場合にこれが言えるなら、次のことが成り立つことになる。

テーゼ2

同じ二つの「もの」について現に成り立っている（真である）どの単称命題も、その二つのものについての「同じ一つの事実」に対する部分的記述と見なすべきである。

テーゼ2に加えて、事実に関わるどの真な命題にも、それを真とする単称命題が存在することを仮定すれば、任意の時点において、どの特定の二つの対象についても、それらの間にどのような命題が成り立っているとしても、そこにはそれらに関する「同じ一つの事実」しかない、という結論が出てくる。すなわち、二つの同じ対象に関して、種種の異なる事実が重なり合って存在するのではなく、ある時点でそれらに関して成り立っている「ただ一つの事実」があって、それがそれらに関してその時点で成立するすべての命題を決定している、ということになる。ここにはただ一つの truth-maker しか存在していない。

以上の結論は、あまりに強すぎると感じられるかもしれない。だが、「事実」がわれわれの認識や理解から独立に（つまりわれわれの側からするパースペクティヴから独立に）成立している何かであり、われわれの側がそれをどう特徴づけるか（どのような言語を用いるか）から論理的に、あるいは存在論的に、先立って存在するものだとするならば、上の結論を否定する妥当な理由を見つけることは難しいと思う。

しかし、問題はここにはとどまらない。次に三項述語の例で考えてみよう。ϕを二項述語「恋人同士である」に対応する概念、ηを一項述語「走っている」に対応する概念とする。これに基づいて、次のような三項概念ξを構成してみる。

ξ（α、β、γ）：αとβが恋人同士であり、かつγは走っている。

あえてξを日本語で表現するなら、「恋走る」とでもいうことになるだろうか。

Hosei University Repository

さて、ϕ（α、β）はξ（α、β、γ）から論理的に帰結するから、上の二項述語の場合と同様の議論によって、「A君とBさんは恋人である」で表現されているのは、「A君とBさんとC君は恋走っている」で表現される事実〈〈α、β、γ〉∴ζ〉の、部分的な（より詳しくない）記述であることになる。ここから以下の議論を組み立てることができる。

(1) α、β、γについてある時点で成り立つどのような命題も、それらについての「同じ一つの事実」によって真となる。

(2) α、βについてある時点で成り立つどのような命題も、α、β、γについて成り立つある命題の部分的記述であると見なしうる。

よって、

(3) α、βについてある時点で成り立つどのような命題も、α、β、γについてその時点で成立している「同じ一つの事実」によって真となる。

したがって、ある時点で3つの対象に関して成り立っている事実と、その3つの対象のうちの2つについて成り立っている事実とは、別々の二つの事実ではない。むしろ、3つの対象について成り立っている「同じ一つの事実」が、そのうちの2つの対象に関する命題の真偽を完全に決定するtruth-makerだと考えられなければならない。

以上の議論は、同様の仕方でどこまでも進めることができる。最終的には、世界にn個の「もの」があるとすると、以下のテーゼが出てくるだろう。

テーゼ3

世界に存在する「もの」が$a_0, \cdots a_n$だとする。世界にはただ一つの事実（「世界文」〈〈$a_0, \cdots a_n$〉∴ϕ〉で表現されるような事実）があり、他のすべての命題は、その事実の部分的な（より詳しくない）記述である。

それゆえ、次のように結論せざるを得ないように思われる。言語的手段を用いて、事実の個体化・差別化を与えようと言う試み、すなわち、事実に対して言語的を介して「輪郭」を与えようと言う試み、は成功しない。世界にはいくつの事実があるのかという問に対する唯一恣意的でない答えは、「一つ」である。世界には「世界は全体としてϕである」と言う事実（「世界文」であらわされるような事実）があるだけである。

ここまでの議論をおさらいしよう。事実とパースペク

Hosei University Repository

ティヴとの関係に関するわれわれの直観的な理解は、「同じ一つの事実」に複数のパースペクティヴが対応し、それぞれのパースペクティヴの妥当性は、当該の「一つの事実」によって決定される、というものであった。すなわち、様々なパースペクティヴに対応するtruth-makerとしての「同じ一つの事実」が存在はずである。だが、事実の個別化・差異化がいかにしてなされうるかをつぶさに考えた時、様々なパースペクティヴが対応すべき「同じ一つの事実」を特定することはできず、可能なことはたかだか「世界全体」という唯一の事実を認めることでしかない。すなわち、実在する真のtruth-makerは、「世界」という分節されていない全体ででしかない。

以上の結論が成り立つとすると、それはどのような含意を持つだろうか。まず、それが何を帰結しないかを見ておこう。

第一に、それは何らかの形の一元論を帰結するわけではない。一元論の重要な論点は、全体に関する知識は部分に関する知識に先行する、あるいは、全体に関する知識なしには、部分に関する知識は整合的ではない、ということである。だが、上の議論はそのようなことを帰結しない。「恋並ぶ」や「恋走る」に関する知識なしに、A君とBさんが恋人であるということを知りえない、ということはなく、いわんや前者の概念なしには後者の概念が理解できないということはない。部分的知識は全体の知識なしにも可能であるし、実際、われわれは部分を知ることを通してしか全体を知りえない。

第二に、それは何らかの形の観念論を帰結するわけでもない。命題や思想を真とするもの truth-maker は、あくまでも「世界」・実在の側で成り立っている事柄である。どのような言語を選択するかを含めて、われわれの側の何らかの条件が、事実の事柄 fact of the matter を変えるわけではない。

だが、「事実は数えられるか」という問から出発したわれわれの考察が、事実の個体化は不可能だというネガティブな結果に至ったということは、何も重要な含意を持たない、というわけではないだろう。何度も触れたように、それは少なくとも、事実とパースペクティヴとの関係に関するわれわれの直観、すなわち、「同じ一つの事実に対して多くの見方が可能である」、あるいは、「多くのパースペクティヴが同じ一つの事実に対応する」という図柄の修正を迫るものである。直観的理解に従えば、事実とは最も具体的な何かであり、われわれの側のパースペクティヴは「同じ一つの事実」の限られた一面のみを切り取る、という意味で抽象的なものと考えられるだろう。だが、これまでの

Hosei University Repository

議論が示したことは、そもそも多くのパースペクティヴと対置される「同じ一つの事実」が何を意味しうるのかに対して、ひいては「事実」の概念について、われわれの直観の修正を迫るものである。「事実」は truth-maker であり、われわれから独立の「実在性」を持つとしても、それ自体としての個別化の原理を欠き、どれか特定の命題・思想を truth-make するわけではない。それゆえ、「もの」とは異なり、事実はある種の「抽象性」を持っている。すなわち、事実は、何らかの「物差し」を差し当てられて初めて、その個別性をあらわにするのであり、あらゆる「物差し」（パースペクティヴ）から独立な「事実そのもの」という概念は、空虚なものである。

次に、これまで論じてきた問題が、思想史や現代哲学の問題とどうかかわるかを簡潔に論じてみたい。

五、デカルトとバークリー

バーナード・ウィリアムスは、「デカルト」という著作の中で、デカルトによって「知識」の概念が近世哲学の中心に置かれた事情と、それが近世の哲学史にもたらした意味について、明快で説得力のある記述を与えている（B. Williams, *Descartes, The Project of Pure Enquiry*, Pelican Books, 1978）。要点を簡潔にまとめると以下のようになるだろう、デカルトが求めた「知識」とは、それ自体として成り立っているもの（いずれにせよそこにあるもの）としての「実在」の知識であり、そのような知識は、われわれの部分的な知識主張（パースペクティヴ）がなぜ成り立ちうるかをも説明できるようなものでなければならない。デカルトは、そのような本来の知識、すなわちパースペクティヴ独立な知識は、数学的自然学の概念によって与えられるものだと考えた。デカルトの企図した「自然学の形而上学的基礎付け」とは、自然科学的諸概念によって与えられる記述や説明が、単に他のパースペクティヴ（信念）なのではなく、「実在」についての真の「知識」でありうるのはいかにしてか、を示そうという企図である。われわれの通常の認識手段（身体的感覚）も、それに基づく素朴な常識的世界の理解も、徹底してわれわれの側の偶然的条件に依存するパースペクティヴ相対的なものであることを考えるなら、われわれがどのような能力によって、またどのような方法によって、パースペクティヴ独立な知識に至ることが可能なのかが示されなければならない。「自然学の形而上学的基礎付け」とは、「知識の可能性の基礎付け」を与えることだったのである。このような見方に立てば、デカルト哲

Hosei University Repository

学の本質は、「我あり」の主観的確実性を確立したことでも、心身二元論を主張したことでもなく、まさにパースペクティヴ独立で非人称的なものとしての「客観的実在性」の概念を規定し、たかだか偶然な条件に支配され一人称的視点をしか持ちえない人間が、そのような客観性に達しうること、そしてそのような客観性が懐疑論のもたらす問（それも一つのパースペクティヴにすぎないのではないのか、という問）に対して、いかにして自らを擁護しうるか、を示そうとしたことにある。

デカルト哲学の中心課題をこのように理解するとき、近世哲学史の中でデカルトの対抗軸として浮かび上がってくる興味深い哲学者は、バークリーである。もちろん、通常デカルトと対比される英語圏の哲学者はロックであり、一般の哲学史の上ではバークリーはロックの批判者として、またロックとヒュームをつなぐ過渡的存在として、位置づけられる場合が多い。また、バークリー哲学に対する一般的理解は、認識論的にはロックに連なる経験論者、形而上学的にはロックに対抗する観念論者・非物質論者（物質反実在論者）だというものだろう。近年ではバークリーを反表象主義的な直接実在論者として解釈する方向も有力であるが、いずれにせよ、いくつかの興味深い議論と鋭い分析を含むとはいえ、バークリーの形而上学全体を肯定的に評価することは難しい、というのが大方の見方ではないだろうか。特に「存在するとは知覚されることである」というバークリーのテーゼは、哲学者の提出した典型的な不合理な主張として、近代・現代の多くの論者から排斥されてきたものである。

しかしながら、バークリー自身の意図の中心がどこにあったかとは別に、バークリーの議論をデカルト的な知識と実在の「絶対概念」の徹底した批判として読み直し、それによって、バークリー哲学の新たな意義を見出すことは可能だと思う。その読み直しとは、バークリーをperspectivistとして読もう、ということである。具体的には、「存在するとは知覚されることである」というテーゼを、パースペクティヴィズムの宣言、すなわち、「いかなるパースペクティヴからも独立な実在」という概念の不整合性を示そうとするもの、として再解釈できるのではないか、ということである。「存在する」は常に、何らかのパースペクティヴに対して言われるのであり、いかなるパースペクティヴからも独立に存在する「客観的・絶対的実在」という概念が、空虚で不整合な概念だということをバークリーは示そうしている、と解釈できるのではないか。実際、バークリーの「物質」批判は、「外的な物質」、「心の外側にある物質」、「物質の絶対的存在」に向けられている。そ

Hosei University Repository

こでの批判の多くは、「もの」（物質）が持つとされる「知られる・知覚される」ことから独立に持つと考えられている多くの性質が、すでに「知られる・知覚されている」ことを前提とし、そのことなしには整合的に理解できない、という論法によって支えられている。「知覚されている」を「あるパースペクティヴのもとにある」と置きかえれば、これらの論法は、上で見たようなデカルト的な「知識」や「実在」概念に対する真正面からの批判だと理解することができるだろう。

バークリーの一つの興味深い点は、彼が先輩のロックや後輩のヒュームとは異なって、きわめて先鋭な形而上学的・存在論的主張をしている、ということである。ロックは不可知論的二元論者であり、ヒュームもおそらくはそうである。彼らも、それぞれの仕方で、デカルトの知識概念を批判しているが、彼らの主要な関心は存在論的なものではない。それに対してバークリーは、存在するものは観念と心のみだ、という極端な形而上学的主張を行う。まさにそれゆえに、バークリーの主張をパースペクティヴィズムとして整合的に読み換えることが可能ならば、パースペクティヴィズムを単に実証主義的・検証主義的立場に基づく相対主義的知識観としてではなく、形而上学的な一つの立場として、すなわち、デカルト的実在論が提示する実在概念とは異なる実在の描像の可能性として、提示する手掛かりになると考えられるのである。

もちろん、上のような読み直しは、バークリーの意図そのものではないし、バークリーの議論をそのままで支持できるとは思えない。たとえば、パースペクティヴィズムは観念論を帰結するわけではないだろう。上で見たように、パースペクティヴ独立な「同じ一つの事実」を否定することは、truth-makerが心的なものであると認めることではない。パースペクティヴィズムの主張が、伝統的な意味での「観念」の先行性や人間的精神の遍在性を含意するわけではない。さらに、バークリーの非物質論の主要な議論である、いわゆるmaster argumentが成功していないことは、多くの論者が指摘するとおりである。非人称的な「客観的」実在の概念は、バークリーの考えた仕方で不整合なものなのではないだろう。だが、それはやはり「抽象的」なものである。抽象的なものは実在しうる。しかし、それは当然、具体的なものではない。そして、具体的なものなしには抽象的なものは存在しえない。抽象的なものを具体的なものと取り違えること（ホワイトヘッドの言う「具体性誤置の誤謬」）こそが、デカルト的・実在論的な実在概念に対して、批判されるべき第一の事柄だというのが、私の現在の理解である。バークリーは、自らの主張を「心」

Hosei University Repository

と「観念」という用語を用いて言い表そうとしたことで、パースペクティヴィズムと観念論を混同してしまったのである。それにもかかわらず、バークリーが、通常理解されている以上に重要な哲学者であり、その哲学は、適切な読み換えによって、現代的な意味を与えうる、と考える。

六、現代哲学の問題として

近世の哲学がデカルトの問といかに格闘してきたのかの物語は、よく知られている。デカルトが「知識」と「実在」の概念を哲学の中心に据えたことによって、問題の基調は「懐疑論の克服」へと向けられた。近世哲学の中心問題は知識の正当化であり認識論的基礎付けであった。すなわち、デカルトの考えたような一人称的意識の確実性から非人称的・客観的知識への筋道が、はたして、またいかにして、可能となるのか、という問題である。

これに対して、20世紀の哲学の主要な動向は、一人称から非人称への移行・超越の可能・不可能の問題というよりも、純粋に一人称的な事実の記述がそもそも整合的な仕方で可能なのか、という点に向けられた。すなわち、純粋な一人称（意識）の視点という概念は、客観的知識の基礎として不十分であるばかりでなく、それ自体不整合なものではないか。われわれは、一人称的視点を理解できるためには、すでに自らを客観的秩序の中にあるものとして理解していなければならないのではないか、という論点が哲学者の間の共通理解として次第に受けいれられるようになった。ここから、デカルト的な「基礎付け主義」の不毛性がしばしば提唱されることになる。

その一方で、近年の心の哲学の議論は、一人称的なパースペクティヴ・認識の特異性へと向けられている。クオリア問題などに端的に示されるように、脳科学や認知科学の発展に基づく客観的（非人称的）理解は、一人称的なパースペクティヴ（意識のパースペクティヴ）の特異性を記述できず、なぜそれが客観的世界に存在し得るかを十分には説明できない。われわれが意識を持つ存在としてこの世界に実在しているという自明な「事実」を考えるなら、純粋な非人称的世界の記述という概念は、世界の具体的記述として、完全なものではないことは明らかだ、と主張されるのである。

さて、事実の個別化の問題の検討を通して私が示唆したかったことは、純粋な一人称的経験記述が、単に不十分であるばかりでなく不整合であると言われねばならないのとまさに同様に、純粋な非人称的世界記述が、具体的客観的なものの記述と考えられるならば、単に不十分であるばか

Hosei University Repository

りでなく不整合なものなのではないのか、ということである。分節された事実という概念は、事実を分節化するパースペクティヴなしには意味を持たず、パースペクティヴ独立な個別的事実の全体からなる世界という想定は、空虚な想定なのではないか。パースペクティヴは、われわれの側の偶然的条件からわれわれの認識に課せられたと言う意味で、本来の意味での「知識」や「実在」の概念にとって余分なものなのではなく、具体的事実や具体的実在の中に本質的に含まれ、世界の構造を規定する何かなのではないか。

「事実は数えられるか」という一見瑣末な問題の考察が、以上のようなモナド論的形而上学の可能性と必要性を示唆しているように私には思われる。

Hosei University Repository

Aspects of Good in Plato's *Gorgias*

Yurie SHIRANE

The purpose of this paper is to show that in Plato's *Gorgias*, Socrates tries to prove his own thesis "doing injustice is evil and shame", by refuting different moral values of three characters, Gorgias, Polus and Callicles. As for what is good and bad, Callicles' criterion is based on pleasure and pain, while Polus' is based on beauty and ugliness. And Gorgias, while knowing that knowledge is the best thing, doesn't realize "doing injustice is evil and shame". Possibly this set of three characters will be then later developed into the tripartite theory of soul in *Resp*. In refuting their moral values, Socrates practices "the art of the conversion of the soul". Socrates maintains his thesis before he starts the dialogue. It is not a result of the elenchus, but a starting point of Socrates' ethical thinking. He fears committing injustice, but never fears death. Here we can see the core of Socrates's philosophy.

* * *